

項目	確認事項	届出内容
基本情報	大学等名1(代表大学等)	京都産業大学
	大学等名1(代表大学等)※カナ	キョウトサンギョウダイガク
	大学等名2(連携大学等)	
	科目名	コンピュータ理工学特別研究ⅡA・ⅡB
	学部・研究科等名	コンピュータ理工学部
	担当教職員名・役職	荻野 晃大・准教授、玉田 春昭・准教授
	受講者数(H28年度実績)※インターンシップ参加者数	7
	受入企業等数	2
	受入企業等名	富士ゼロックスグループ(富士ゼロックス京都株式会社、富士ゼロックス西日本株式会社)、株式会社堀場製作所、株式会社テクノアドバンス
	インターンシップの分類	1.長期(概ね1か月以上)インターンシップ,6.大企業・グローバル企業でのインターンシップ,7.中小企業でのインターンシップ,9.その他
上記以外のインターンシップの分類(記述欄)	特別(卒業)研究の一環としてインターンシップを組込んでいる。	
要素①	1-1.当該インターンシップは、就業体験を伴うものになっていますか。	1.はい
	1-2.該当する就業体験	2.企業等における課題の解決(例:ワークショップ、PBL型プログラム、課題解決ワーク、課題事例研究等)
	1-2.以外での就業体験の内容(記述欄)	
	1-3.上記回答内容に関する詳細(記述欄)	大学で学んだ知識や技能を活用することを目的とし、企業と教員・学生とが話し合いによって実習テーマを設定する。そして学生に対して、実習過程においてモノ(ソフトウェアやハードウェア)を制作すること、または、課題分析から新しい提案を考案し、レポートとしてまとめることを課すことで、新しいシステムの立案、設計とその実装する能力の向上を試みた。
要素②	2-1.当該インターンシップを正規の教育課程の中に位置付け、シラバス等において、インターンシップの実施目的や期待する教育的効果を明確にしているなど、体系的なプログラムとして単位認定が行われていますか。	1.はい
	2-2.該当するインターンシップの内容	9.その他
	2-2.以外で実施しているインターンシップの内容(記述欄)	当該科目は必修科目であるが、インターンシップについては、必須ではない。
	2-3.当該インターンシップを実施する年次(記述欄)	3年次～4年次
	2-4.当該インターンシップで付与される単位数(記述欄)	6単位
2-5.上記回答内容に関する詳細(記述欄)	4年次生の通年科目である特別研究の一環として組み込まれたインターンシップである。(4年次授業開始前から実施している)専門教育科目の6単位を付与している。	
要素③	3-1.インターンシップの実施前の学生・企業双方との目標設定や目的のすり合わせや、実施後の振り返り等を行うなどの適切な学修の時間が設けられていますか。また、インターンシップの教育的効果が発揮されるようインターンシップ期間中に適切なモニタリングを実施していますか。	1.はい
	3-2-1.該当する事前学習の内容	1.学生に対して、社会人としてのマナーや守秘義務の遵守、パソコンの使用方法等を身に付ける授業等を行っている。2.学生が受入企業の事業内容等に関する事前の調査・研究を行っている。3.学生に対して、インターンシップにおける成果目標の確認や行動計画等の策定を行っている。4.学生に対して、正規の教育課程としてのインターンシップの実施目的や期待する教育的効果の理解を促している
	3-2-1.以外で実施している事前学習の内容(記述欄)	
	3-2-2.該当する事後学習の内容	1.日報やレポート等を用いて、現場での体験の振り返りを行っている。2.報告会等により、インターンシップの成果について、受入企業や担当社員へのフィードバックを行っている。3.振り返りを実施し、成果目標等の達成について確認を行っている
	3-2-2.以外で実施している事後学習の内容(記述欄)	
	3-2-3.該当するモニタリング	1.インターンシップ中に、教職員が定期的に企業等に赴き、学生と面談を実施している。3.その他
	3-2-3.以外で実施しているモニタリングの内容(記述欄)	インターンシップの期間中は、企業での実習以外に研究室にて継続的に課題に取り組み、いつでも教員に相談ができる体制づくりをしている。更に教員も複数名でバックアップできる体制にある。
	3-3-1.事前学習の内容に関する詳細(記述欄)	社会人としての最低限のマナーに関して指導し、重要である情報倫理については、徹底した指導を行う。さらに、ソフトウェアを開発する上で必要な考え方やスキルなどの授業で学んだ知識の活用方法について模擬開発実習を通して学ぶ機会を設ける。具体的には、既存の情報システムの問題点を分析、その改良版をペーパープロトタイプするという模擬開発実習を行う。必要に応じて専門知識やプログラミング言語の学習機会も設ける。
	3-3-2.事後学習の内容に関する詳細(記述欄)	事後学習では、実習での活動において、「良い点であったので今後の卒業研究に活かしたいこと(Keep)」、「問題点であったので今後の卒業研究では気をつけたいこと(Problem)」、「今後の卒業研究において実施してみたいこと(Try)」の3つの軸で整理するKPT分析(堀、2013)を用いて振り返り、学生が実習で得た知識や経験を今後の卒業研究で生かす機会を設ける。
	3-3-3.モニタリングの内容に関する詳細(記述欄)	
要素④	4-1.インターンシップの教育的効果を定量的・定性的に把握できる手法・仕組みを取り入れていますか。	1.はい
	4-2.該当する教育的効果を測定する仕組み	4.その他
	4-2.以外で実施している教育的効果を測定する仕組み(記述欄)	PROGテストを実習の前後で行い、それぞれの結果を比較することにより、その実習での学生の成長を評価している。

4-3.上記回答内容に関する詳細(記述欄)	PROG テストは、リテラシー能力(知識を活用する力)とコンピテンシー能力(実践的に働きかけ対処する力)の両面から個人のジェネリックスキルを測定している。	
要素⑤	5-1.一定期間のまとまりのある連続した5日間以上のインターンシップの実施期間を確保していますか。	1.はい
	5-2.該当する実施期間	4.その他
	5-2.で「1.連続した5日間以上」を選択した場合(記述欄)	
	5-2.で「2.事前・事後学習を合わせて5日間以上」を選択した場合(記述欄)	
	5-2.で「3.複数の企業等を合わせて5日間以上」を選択した場合(記述欄)	
	5-2.以外の実施期間の内容(記述欄)	実施期間3ヵ月間(うちインターンシップ実施期間12日間)1回/週で企業に訪問し、進捗報告と次週に向けての課題を確認後、課題に取り組む。その日以降もオンラインでのインターンシップを継続する。
5-3.上記回答内容に関する詳細(記述欄)	3月から5月までの3ヶ月間の期間、3社の企業とともに、7名の学生(全員、男子学生)に対して実施した。	
要素⑥	6-1.大学等と企業の双方が関与し合い、学生に対する教育的効果の最大化に努めているなど、大学等と企業が協働してプログラムを設計していますか。	1.はい
	6-2.該当する大学等と企業の協働取組の内容	1.企業や産業界にとっての意義やメリット、必要な成果等を考慮し、企業と協働してインターンシッププログラムを設計している。2.大学等が行う事前・事後学習等に企業等も参画し、協働して実施している。4.受入企業等も、インターンシップ中の学生に対する評価を実施している
	6-2.以外で実施している大学等と企業の協働取組の内容(記述欄)	
	6-3.上記回答内容に関する詳細(記述欄)	大学で学んだ知識や技能を利活用することを目的とし、企業と教員・学生とが話し合いによって実習テーマを設定する。そして学生に対して、実習過程においてモノ(ソフトウェアやハードウェア)を制作すること、または、課題分析から新しい提案を考案し、レポートとしてまとめることを課すことで、新しいシステムの立案、設計とその実装する能力の向上を試みた。
7.上記①～⑥で回答した各要素の内容について、詳細が記載されているシラバスなどの資料が閲覧できる大学等のウェブサイトのURL	https://ksu.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=2463	
問い合わせ先	大学等名	京都産業大学
	担当部署名	教学センター(コンピュータ理工学部事務室)
	担当者役職名	
	担当者氏名	
	電話番号	075-705-1989
	メールアドレス	computer-st-jim@star.kyoto-su.ac.jp